

10 月に入り、今年のノーベル医学生理学賞に東京工業大の大隅良典栄誉教授が受賞されるという嬉しい知らせが届きました。

さて 10 月は「経済と地域社会の発展月間」です。また、日本では米山月間でもあります。当クラブも、米山奨学生の曹 伴鵬 (ウ ハツウ) 君が在籍されておりますので、本日は米山記念奨学金事業についてお話しします。

ロータリー米山記念奨学金は、1952 年に事業が始まって以来、日本のすべてのロータリアンが参加し推進している事業で、毎月の寄付金と資産の利子収入だけで成り立っています。日本で学ぶ外国人留学生に対して、奨学金を支給し支援していますが、2016 年度の米山奨学生は 750 人、これまでに支援した奨学生数は 2016 年 7 月現在累計で 19197 人になります。事業費は 15.7 億円 (2015 年) で、外国人留学生を対象とした民間の奨学金は 129 団体ありますが、国内最大規模です。留学生の出身国は、世界 124 の国と地域に及びます。2016 学年度の留学生は、中国が 40.1%、つづいて韓国が 15.2%、ベトナムが 12.5%となっていますが、最近ではベトナム・モンゴル・ネパールからの留学生が増加しています。累計では、中国が 33.2%、韓国が 22.7%、台湾が 17.9%の順となっています。

さて、ロータリー米山記念奨学会の「米山」とは、ご存じのように日本で最初のロータリークラブを創立した米山梅吉翁のことです。米山記念奨学会の資料によりますと、1946 年に“日本のロータリーの父” 米山梅吉氏が亡くなりました。3 年後の 1949 年、戦争のため解散を余儀なくされた日本のロータリーが、国際ロータリーへ再び復帰しました。戦後の落ち着きを取り戻すにつれ、米山梅吉氏の功績を永遠に偲ぶことができるような、何か有益な事業をやろうではないかという声が大きくなってきました。当時の日本はまだ食糧事情もはかばかしくなく、会員たちは「クラブへ行けばお茶を入れてもらえる」と、弁当を持参し、ストーブを囲みながら熱心に議論をしていたそうです。そして 1952 年、東京 RC の古沢会長が「米山基金」の構想を発表しました。これは、アジアから優秀な学生を招いて学費を援助し、二度と戦争の悲劇を繰り返さないために“平和日本”を肌で感じてもらいたいというものでした。こうして、東京 RC が始めた「米山基金」は、わずか 5 年で、日本の全ロータリークラブの共同事業として継承され、1967 年には財団法人ロータリー米山記念奨学会が設立されました。

第 1 号の米山奨学生は、タイから来たソムチャード君でした。バンコクを出

航してから約1週間の船旅で台風にも遭いましたが、1954年9月28日、横浜港に無事到着しました。彼を出迎えた日が、米山奨学事業の第1歩でした。彼はタイの大学の農学博士を取得した25才の青年で、古沢委員長は半年間国際学友会で日本語の授業を受ける段取りをしましたが、病に倒れながらも彼が東京大学農学部の大学院入学試験に合格できるかを案じておられました。努力が実って無事に合格し、東京大学修士課程を卒業されましたが、タイに帰国後は、蚕糸局に入局して重要なポストを務められ、タイのシルク産業に寄与されたそうです。

ところで、米山奨学金が他の奨学金と異なる点は、「世話クラブ・カウンセラー制度」です。銀行振込が多い他の奨学金とは違って、米山奨学生にはロータリー活動に共に参加してもらい、交流することを大切にしています。月末の最終例会日には米山奨学生に出席してもらい、会長から直接奨学金を手渡しするようにしております。

最後になりますが、2017年7月、米山記念奨学会は財団設立50周年を迎えます。日本で学ぶ外国人留学生は、当初4,000人程度でありましたが、現在では20万人に及んでおります。留学生の受け入れは、グローバル社会の今、重要な国家戦略の一つだと思います。米山奨学事業は、ただお金を支援するものではありません。一番大切なことは、彼らに日本で勉学をして頂くことと、それと同時に実際の日本をよく知ってもらうことです。日本にたくさんの友人を作ってもらい、自国に帰っても、平和を求めるロータリーの精神を理解し受け継いでもらいたいと思います。地道ではありますが、人対人の交流は、いつかは地域の平和に結びつくと思います。

本日は、ロータリー-米山記念奨学金事業についてお話をしました。